

和太鼓祭音による鎮魂の舞
「三本柳さんさ踊り」



中村哲さんの 生き方から学ぶもの

2019年、中村哲さんを講師にお迎えした「地球市民講座」から約2か月後、中村さんは凶弾に倒れました。今回は追悼の意を込めて、親交の深かった駐日アフガニスタン前特命全権大使のモハバットさんや現地で活動された目黒丞さんをお迎えしてお話、和太鼓祭音による鎮魂の舞「三本柳さんさ踊り」の内容で、2021年3月20日に開催した「地球市民講座」からお届けします。

バシール・モハバット 駐日アフガニスタン前特命全権大使によるお話

中村先生が果たしたこと

中村先生は長年にわたり、医療支援をはじめ、農業支援、そして灌漑事業を通じ、砂漠だった土地を緑豊かな土地に変えてくださいました。

中村先生は「100の診療所より一本の用水路を」と訴え、干ばつの悪化により、水不足・栄養失調・感染症に苦しむアフガニスタンの人々の生活を変えるため、その生涯をささげてくださいました。自ら現地の人々と共に生活をされた中村先生だからこそ、現状を変えるためには、水環境を整えることが第一だという考えに至ったと思います。1,600か所以上の井戸を掘ることにより、住民がきれいな水を飲めるようになり、そして水路を作ることにより農地に水が行き渡り、農産物が育って、100万人以上もの人々の生活が変えられ、よくなりました。

「カカムラッド」は私たちのヒーロー

現地では中村先生は「カカムラッド(ムラッドおじさん)」と呼ばれ、子どもから大人まで多くの人々に慕われていました。日本人であり、アフガン人でもある「カカムラッド」は、私たちのヒーローです。先生を救えなかったことは本当に申しわけないと思っております。悔しさと悲しみで胸がいっぱいです。アフガニスタンの人々のために全力を尽くしてくださいました先生の復興支援への献身と努力は、言葉で言い尽くすことはできません。

先生とアフガニスタン

2002年、アメリカの空爆にあってタリバンが崩壊して、国連をはじめ、日本政府、全世界がバックアップしてカルザイ大統領の政権が誕生した、ちょうど2003年に、私は一等書記官として大使館に入りました。中村先生とはなぜかすぐお互いに非常に親しくなりました。

先生はね、人間の偉大さとか、心の広さとか、証明した人。36年、自分の一番大事な

人生の若い時をアフガニスタンで過ごしたということ自体がそう。もともとアフガン人は平和好きで、非常に明るい。お客さんを大事にしたりおもてなしの国。風景がものすごくきれい。あと料理もむっちゃおいしい。何よりも人間がいい。だから先生もそこに惚れたというもあるんです。他方には、残念ながら42年間の戦争で、病気だとか、貧しさだとか、確かに続いた国なんです。戦争の中ですから、いろんな争いとかなんか難しい環境の中で、先生は36年過ごされたんです。

先生の言葉

私個人、何回も人生の難しい時、困難な時、言われた先生の一言「いやモハバットさん、やればできる」って…いつもこれを言われてた。「やればできる」、そう、それを証明した方です。みなさんもそれぞれ悩みとか難しさとか問題とかいろいろあると思うんです。でも、先生がああ(砂漠を緑にした用水路の)プロジェクトをやったことに比べると、なんて小さな悩みかなといつも思うんです。先生があんなことをできたということ自分を向けて(考えて)みてください。あなたは絶対(に何でも)できるはずですよ。

先生の計画と僕らができること

アフガニスタンは四つの季節があって、ちょうど日本と一緒に春夏秋冬なんだけど、冬は結構厳しいです。3,000から4,000mの山があって、雪もたくさんふります。だから、結構水も豊富なので、周りの国は全部アフガニスタンから水をもらっています。先生はあちこちにダムを造る計画も全部していました。大統領とか政府とも話していました。ダムがないと電気もない、農業も困るんです。そこで、残念ながらテロがおこったのは水のこと。非常に大事なポイントだったからです。これは完全にテロ。アフガン人

は、絶対に先生に対して、そんなことするわけがないんです。

先生は残念ながら戻られないけれど、いつも「あと30年は頑張ります」と言っていました。そう言っていた30年、できれば30年以上、僕は一生懸命「先生は何をやった方か、どういう方だったか、どういう心、どういう考えを持っていたか、どんなに偉大な方だったか、彼から何を学べるか」を話して(いきたいです)。

戦争が生んだもの

アフガニスタンのこんな戦争や難民がいつ始まったかと言いますと、1979年12月27日。これは旧ソ連の侵略です。私が日本に来たのは1976年で、その時のアフガニスタンの生活は、ほとんど東京とかかわらなかったんです。首都カブールには一か月以内に、ロンドン、パリ、ミラノのファッションが(来ていました。)非常にハイクラスで、私が東京にきたばかりの時、羽田はまだ丸い眼鏡の世界でした。こんな目に合わせたのはあの戦争なんです。戦争の12年間。アフガニスタンはひどく戦って2~300万人の犠牲者を出して、1,000万の難民もだして、国がぼろぼろになった闘い。そのかわりに旧ソ連も崩壊、共産主義も終わり、たくさんの国も自由になった。ただ残念ながらたくさんの問題は今日まで戦争、ちょっとかわただけで(続いています)。残念ながら。

今年はいいい春が来るように願っています。

(文字起こし・編集:川崎市国際交流協会 加藤)

*本掲載文はそれぞれのお話・対談から抜粋し、読みやすく編集したものです。全文は川崎市国際交流協会の以下のWebページで読むことができます。
(<https://www.kian.or.jp/kic/topics/signal-sp153.shtml>) (QRコード⇒)

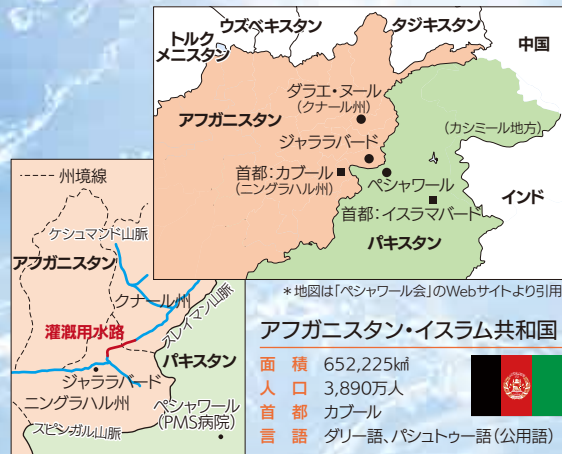


参加者の声

- 前大使のお話から、アフガン人と日本人の強い絆を結んだ中村医師の偉大な功績をさらに知ることができました。目黒氏のお話からは、不屈の精神で無から有を生じさせる中村医師の姿を垣間見ることができました。中村哲医師に触発されて続いていく人材が出てくるよう願っています。
- 「議論はいらない、まず行動することが大事」という中村医師の言葉をモットーにしたいと思います。
- 私は今19歳で、同時多発テロが起きた2001年に生まれました。その当時世界で何があったかテレビで知り、そこで中村哲さんについても聞きました。人のために動く中村さんにすごく感銘を受けました。今回すばらしいお話を聞かせていただき、私も将来何かのために人生にしたいという思いが強くなりました。



対談の様子
(左:山本忠利さん
中央:モハバットさん
右:目黒丞さん)



| アフガニスタン・イスラム共和国 | |
|-----------------|------------------------|
| 面積 | 652,225km ² |
| 人口 | 3,890万人 |
| 首都 | カブール |
| 言語 | ダリー語、パシュトゥー語(公用語) |

国際NGO(NPO)団体ペシャワール会 元現地の水利計画担当者 目黒丞さんのお話

～山本忠利さん(かわさき国際交流民間団体協議会会長)との対談より抜粋～

アフガニスタンへ

私がアフガニスタンに行ったのは、2000年の10月。その2、3か月前から、中村先生のもとで井戸掘りの事業が始まって、現地の友人に「今からアフガニスタンに来られるか。旅費とか考えなくていいから、1、2か月だけ手伝いに来ないか」と声をかけられ、行ったことのない国に行ってみようという軽い気持ちで行きました。

ところが、パキスタンのイスラマバード空港に降りてすぐにパスポートを盗まれ、ペシャワール会*の病院に身を寄せて、お手伝いをしながら居候をしていました。周りでは毎日、難民とパキスタンのお金のない人を無償で診療していて、観光気分に来てしまった自分が恥ずかしくなりました。

1か月後、初めて中村先生にお会いし、とりあえず1年いさせてくださいとお願いをして、結局3年いました。

当時の状況

当時、(大干ばつで)本当に水がなかったんです。(井戸を掘っても)なかなか出なかった。

ダラエ・ヌール(クナール州)の谷を回って、どこに井戸を掘るかという調査をしている時に、目の前で、子どもが泥水を飲んでいて、一緒にいたアフガン人のエンジニアが「飲むな!こんなに汚い水を!」と怒鳴ってるんですけど、子ども達は「他に水がないのになんで飲むじゃダメなの?」という顔でした。もう悔しくて。

中村先生=日本への信頼

中村先生とペシャワール会・PMS*はもう何十年も活動していたので、途中で逃げないという信頼感と、日本人をすごく愛してくれてたんですね。他の国は(交換条件として)政治、宗教、利権を持ち込む。何か別の目的があるのかなと。(日本みたいに)何も要求しないで仕事をして、お金を出して帰っていく国はないって。

*ペシャワール会は中村哲医師の活動を支援する目的で結成された国際NGO(NPO)団体。PMS(Peace Japan) Medical Servicesは、平和医療団・日本 総院長の中村哲医師が率いる現地事業体。(ペシャワール会のWebサイトより)

911事件でアメリカの空爆が始まった

クラスター爆弾って、空中で破裂して黄色い円筒が、畑や民家にばらまかれるんですね。大人はわかるんです。危ないって。子どもはわからないので触ってしまっ。ジャララバードでも何人も死んでいたと聞きました。

作業は一切ストップさせられました。(私は)日本人なら爆撃されないんじゃないかと思いましたが、アフガン人のエンジニアとか中村先生にも怒られました。追い立てられるようにパキスタン側に避難させられて、テレビをつければ、アメリカの空母からミサイルを飛ばしているのが流れて、その落ちていく下に友達が、うちのエンジニア達がいる。もしかしたら、長老が死んでいるかもしれないって。何もできずにイライラして、すごい悔しい数日を過ごしてましたね。

爆撃が終わって井戸掘りを再開

普通に井戸を掘る時は、水深で50cmから1mくらい深さをとるので、10年、20年もつんです。ところが、私がいた2000年から2003年は、常に水位が下がり続け、完成したと思って枯れてしまっ。掘り直しというのを何度も繰り返してました。予想以上に、水位が下がるのが早かった。スピンガル(白い花)山脈が、冬になっても雪が全然積もらない。井戸水は、雪がゆっくり解けて地帯に入って、水になって地表に戻ってくるんですけど、雪がないせいで、すごい勢いで枯れてましたね。最高、80mの深さも掘りましたが、それでも水を出しきれなくて、難民化してしまう村もあり、いつまでこれを続けていくんだろうという、絶望的な気持ちがかここかにありました。

用水路を掘る?!

(そんな時に)中村先生が「クナール川から水を引けばこの砂漠、荒地が緑になるんじゃないか」といきなり言いだされました。

(私は)現実感がわかなかったです。「先生はお医者さんですよ。今そんな話をして、できるわけじゃないですか」と猛反対しちゃいました。井戸掘りの部分の責任者を任されていたので「無茶言わないで、もうちょっと頑張らせてください」と。

(アフガン人も)

「できるわけない」というのがほとんどでしたが、水さえあれば生きていけると、顔つきが変わるメンバーはすごく多かったですね。



先生に教えてもらったこと

私にとっては、すごい怖い先生なんです。先生の前では常に正座。たばこも先生の前では吸ったことはなくて、父親よりも怖い存在なんです。カッコいいとか悪いとか関係なく、やらなくちゃいけないことを泥まみれになっても、できるまでやれって。そして、できるまでやらせてくれる人ですし、できるまで本人がやり続ける人ですね。人の評価とか見た目とか関係なく。(先生は)罵られることも、評価されないことも多かったですし、日本人が、思いつきでそんな水路引くなんて、できるわけないじゃんとか散々言われても、やり続けてやっちゃう人ですね。

「仕事だからちゃんとやろう」という気持ちだけで、責任をもって毎日、会社に行く。「今できることを一つずつ丁寧にやって、それが結果としてでるんだよ」ということを中村先生に教えてもらったと思うんです。先生みたいにすごく大きい視野、視点で成し遂げられる人ってなかなかいないと思うんです。そして周りに集まった人がみんなで一生涯懸命コツコツ積み上げていった結果が水路だと思っんです。

当時もこういう講演会に多くの人が集まって、応援して下さって集まったお金で、現地でものを買えたと思うと、あの水路は、支えた皆さんと一緒に作ったものなんだなというのがあります。

中村哲先生は亡くなったけど、仕事はまだ続いていますし、皆さんがこうして聞いてくださる限りは、続けていけるものだと思っています。

(文字起こし:川崎市国際交流協会 大知)
(編集:川崎市国際交流協会 加藤)
(写真:編集ボランティア 安田芳郎)

職員の感想

本講座は、福岡で行われた中村哲さんのお別れ会の際に、アフガニスタンのパシール・モハバット前大使が涙しながら弔辞を読まれたことに感銘を受け、かわさき国際交流民間団体協議会会長の山本忠利さんが直接、大使にオファーしたことにより実現した。「追悼講演会」のようにジメジメした会ではなく、中村哲さんの生き様から自分が市民レベルとしてできることは何かを、参加者が考えられるような会にしたという山本さんの思いから、中村哲さんの考え方や生き方を心に刻めるような構成であった。井戸を掘り続け、用水路までも作るという中村哲さんの意志の固さと、誰もが無理だろうと思えることを自分の手を動かし、諦めずに実現した偉大さをひしひしと感じさせられた。

(川崎市国際交流協会 大知)